

ラジオNIKKEI ■放送 毎週木曜日 21:00~21:15

# マルホ皮膚科セミナー

2011年4月28日放送

第25回日本乾癬学会①

「大会を終えて」

山口大学大学院 皮膚科教授  
武藤 正彦

## はじめに

2010年9月3日・4日の  
両日、山口県宇部市において第  
25回日本乾癬学会・学術大会  
を開催させていただき、台風の  
直撃を受けることもなく、無事  
に学術大会を終えることが出  
来ました。国内各地の皆様方  
からの暖かい御支援を賜り、学会  
参加者数も500名をゆうに  
超え、一般演題数101題と演  
題の数が初めて100を超え  
たことを大変喜ばしく思っ

ています。顧みますと、第1回日本乾癬学会が、大分県別府市において、九州大学中溝慶生教授を会長として、1986年10月29-30日に開催されて以来、今回の学術大会が第25回目の節目を迎えました。そこで、本学術大会のテーマを「世界に発信しよう！日本の乾癬学」として、乾癬に関する基礎から臨床にわたる広い範囲から、この25年間になされた日本人による研究の集大成を図ろうと決め、プログラム委員会でのご承認を得て、一般演題の他に、7つのシンポジウムテーマを用意させていただきました。

さらに、今回の学会が盛り上がった理由のひとつは、2010年1月に乾癬治療のための生物製剤2剤（インフリキシマブとアダリムマブ）が、国からようやく承認され、乾癬治療に新しい選択肢が加わったことが特筆されるべきでしょう。

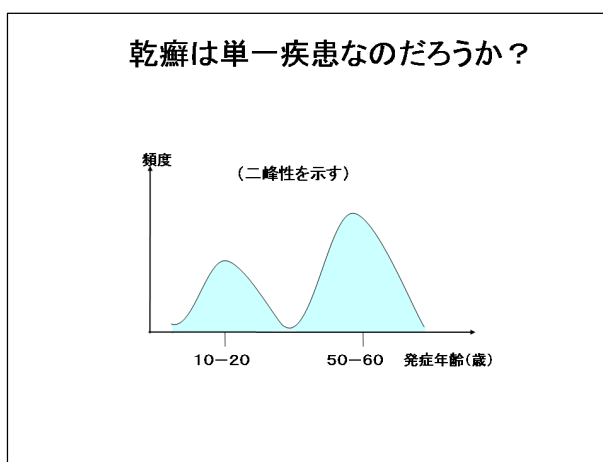


## 特別講演・教育講演

それでは、各論的にふり返っていきたいと思います。今回唯一の特別講演には、私が大学院生としてご指導いただいた九州大学高等研究院の笹月健彦先生に、「尋常性乾癬の免疫遺伝学—HLA revisited—」と題して、免疫応答あるいは免疫制御に重要な HLA の現状と今後の目指すべき方向性についてグローバルな立場からご講演いただきました。

「HLA は、過去の遺産でしかないのではないか、いや、HLA 分子内に収納される抗原ペプチドの解析を含めこれから HLA 研究のセカンドステージが地球規模ではじまるのである」、といったやりとりの内容で、演者と座長の島田眞路先生との絶妙な質疑応答に会場の多くの参加者が魅了されたものと感じました。

教育講演 1 では、秋山真志先生に、皮膚バリア機能の研究成果をご発表いただきました。アトピー性皮膚炎とフィラグリン遺伝子異常との相関について、人類遺伝学的な考察がなされましたが、人種間におけるハプロタイプ形成の多様性があるというお話は興味をもって聴かせていただきました。教育講演 2 では、UCSF の John Koo 先生に、アメリカにおける乾癬治療について生物製剤を含めて最新事情をご紹介いただきました。



## シンポジウム

シンポジウム 1 では、乾癬病態モデル動物に関する最新情報をまとめていただきました。サイトカインと Jak-STAT シグナル経路との関連、角化に関わるコルネオデスモン (Cdsn) 遺伝子のノックアウト効果についてその重要性が述べられました。

若手研究者による国際シンポジウムとして位置づけたシンポジウム 2 の会場も、150名ほどの参加者があり、会場の先生方との質疑応答も活発で安堵しました。T 細胞はもちろん、樹状細胞や線維芽細胞など炎症に関する細胞の最新の知見を得ることができ、これも座長の先生方による演者の選択が適切であったためだと、改めて感謝しています。

免疫病乾癬の構成要素

標的	マーカー遺伝子
Macrophage	CTLA4/B7-1(CD80), B7-2(CD86)
T cell NK-T cell	IL-23R KIR
Neutrophil	LMIR(CD300)
Mast cell	
Cytokines(Adipocytokine)	IL-12/IL-23p40 TNF- $\alpha$
Transcription factors	RUNX1 NF- $\kappa$ B

25周年記念事業として、シンポジウム3を企画しました。石橋康正、小川秀興、そして飯塚一のご高名な先生方より成る座長団を配し、日本乾癬学会の設立当時の事情を中溝慶生先生に、乾癬の病因解明促進のために乾癬遺伝子保存プロジェクト班の設置を決意された当時のお話を手塚正先生に、そして現日本乾癬学会理事長の中川秀己先生に今後の乾癬学の基本戦略についてその思いを語っていただきました。以上3名の先生方のご講演を受けて、日本乾癬学会に期待することを辛口の北島康生先生におまとめいただきました。これから、乾癬の研究を始たいと思っている若い先生方にとって、短時間でありましたが、この25年の本学会の歩みの概要をご理解いただけたのではないかと思います。

シンポジウム4では、生物製剤の海外事情をドイツ・ゲッチンゲンの K. Reich 先生に、国内事情を森田明理先生にお話いただきましたが、会場は立見席がでるほどの盛況ぶりで、演者の先生方の発表にも自然と力がこもっていたのが印象的でした。

エトレチナートをはじめとする内服薬および皮膚への直接的ドラッグデリバリー効果をもつ外用療法の位置づけを確認しておく意味もあり、シンポジウム5の「乾癬と代謝」、シンポジウム6の「乾癬治療の今昔物語」を設けました。古くて新しい乾癬治療戦略を考えていく上で、一次ないし二次無効例の存在など、生物製剤の使用で PASI75 に到達できる患者さんの割合が70-80%と、生物製剤が乾癬治療の万能薬とまでは言えない現状を考慮したとき、リノール酸の代謝産物のひとつである 13(S)-HODE が NF- $\kappa$ B の制御にも関与するなど、代謝産物による細胞機能の調節効果が発表され、新鮮味がありかつ有益なものとなったのではないかと思います。

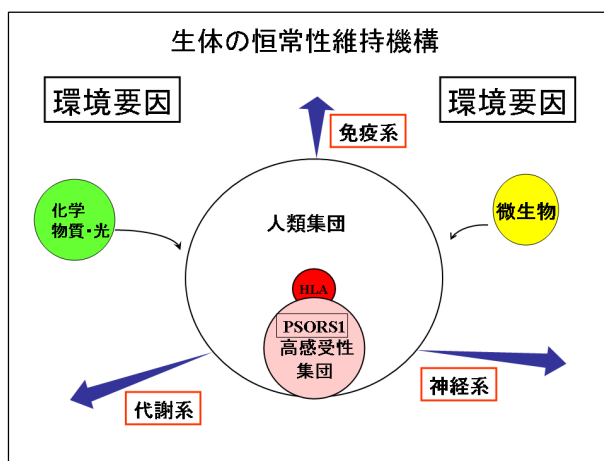
シンポジウム7では、これまでの医師主導の講演スタイルから、看護師の方にも入っていただき、チームとしての乾癬治療のあり方をどう捉えていけばよいのか、を語っていただきましたが、医師の目線からはみえてこない、現場最前線ならでのものがあることが判り、私自身、拝聴して自らの反省点を含め、大変役に立ちました。学会2日目最後のシンポジウムであったにもかかわらず、ほぼ満席状態であったことから、会員の先生方の関心の高さが窺われました。

学会初日が終わった後の会員懇親会では、会場が少し手狭で、会場内に入りきれなかった方もいらっしやって、大変ご迷惑をおかけいたしました。アトラクションとして、大槻マミ太郎先生に、ピアノ独奏をお願いしましたが、ジャズ風でありながら、格調ある曲目を数曲演奏していただき、大変ありがとうございました。会場の先生方も、大槻先生の演奏風景をカメラに納めておられました。

初日のランチョンセミナーでは、お弁当の数が足りなくなる等、嬉しい悲鳴でした。2日目のモーニングセミナーで、内科医である両角國男先生のシクロスポリン製剤による腎障害回避のコツに関する講演は有益でした。

## おわりに

乾癬は皮膚病でありながら、脂質代謝異常を始めとする内科的な知識や治療技術を要するために、奥の深い疾患であることを今回の学会を通じて、改めて理解することができました。古代ローマ帝国時代から、その存在が知られている乾癬ですが、2000年の長い時を経ても、その原因の解明及び根治的治療法を患者さんの目の前に提示することができないもどかしさを感じています。思いますに、乾癬の理解を深めるためには、単に、TIP-DC や Th17 細胞説を中心とする免疫学的側面だけでなく、代謝面、そしてニューロペプチドを含む神経系の側面からも、これまで以上に、光をあてていく必要があるように思われます。他方、ケラチノサイトや免疫担当細胞と相互作用する環境要因の側からの探索、例えば、外的因子としての溶連菌感染、あるいは内的因子としての LL37 抗菌ペプチド、など様々な因子が挙げられます。乾癬におけるケブネル現象の誘発メカニズムのブレイクスルーになるかもしれません。



「今回の乾癬学会はおもしろかった」とのご感想を参加された何人かの先生方から窺うことができ、学会会長として、これで良かったのかなと自己満足しています。これから乾癬研究の道を歩もうとする若手の先生方には、是非とも「木を見て森を見ず」とならないように留意してほしいと願っています。次の25年間に、分子レベル・原子レベルで、乾癬の病態を理解することができ、ピラミッド計画に基づく個別的最適化制御可能な乾癬治療の時代がやってくるであろうことを期待して私の話をおわりにしたいと思います。